九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

現行民法典を創った人びと（3）起草委員 ： 穂積陳重・富井政章・梅謙次郎

七戸, 克彦
九州大学大学院法学研究院教授

https://hdl.handle.net/2324/15930

出版情報：法学セミナー. 54 (7), pp.64-66, 2009-07-01. NIPPON HYORONSHA
バージョン：
権利関係：

起草委員——穂積陳重・富井政章・梅謙次郎

九州大学教授 七戸克彦

穂積陳重（1855-1926）

明治27年、40歳の穂積陳重[1]

1　現行民法典の起草委員３人の最年長である穂積陳重（ほづみのぶしげ）は、安政２年７月11日、伊予・宇和島藩士鉄砲頭・穂積重樹の二男に生まれた。藩校・明倫館で学んだ後、明治３年大学南校貢進生となる。大学南校は、明治６年開成学校を経て、東京大学法・理・文学部へと連なる組織、貢進生とは、明治政府が各藩の費用で大学南校に学ばせた者たちであるが、貢進生の制度は、明治３年の一度限りで終わる。それゆえ、選抜された陳重は幸運といえるが、しかし、成績不良の彼は、明治８年の第１回文部省留学生にはなれず、翌９年の第２回留学生としてイギリスに渡った。

ロンドンのミドル・テンプルに入学した陳重は、オースティンの影響を受けてドイツ法に傾斜し、明治12年の卒業後、ドイツへの転国を願い出るが、結果的には、この転換が、陳重の後の成功をもたらした。保守化したかつての自由民権論者・加藤弘之東京大学綜理が、大学教育の適材として、陳重に目をつけたからである。陳重の帰国の前年に講師となっていた同級のエース鳩山和夫が、陳重帰国の明治14年に舌禍事件を起こし、15年１月に退職したことも幸いした。翌２月陳重は27歳の若さで教授兼法学部長となる。この時期、日本人の教授は、陳重と、老齢の国学者・小中村清矩の２人しかいない。

2　一方、プライベートでも、陳重は、明治15年４月、渋沢栄一の長女・歌子と見合結婚（媒酌は同郷の大先輩である児島惟謙）、以後の彼の人生は、世間的には時流に乗った成功者の典型といえる。明治41年には京都大学の総長候補として名前が挙がり、東大では就職先の斡旋を求める学生が殺到して１日40人にも達した[2]。明治45年の東大退官後も、大正４年には特授男爵、翌５年には枢密院顧問官、翌６年には帝国学士院長、14年には枢密院副議長から議長に昇り、翌大正15年４月８日の死去までその地位にあった。

3　だが、陳重が、鳩山について語るときの冷ややかな口調の背後には、留学で後れをとった同級の首席に対するコンプレックスが見え隠れする。一方、陳重は、富井政章ら後輩教授に対しては余裕をもって接しているが、しかし、梅謙次郎に対してだけは、ライバル意識と嫉妬と羨望が複雑に入り交じった感情を抱いていたように見える。たとえば法典調査会の第15回主査会（明治26年11月28日）審議において、ドイツ通をもって自負する横田国臣に対し、梅がドイツ民法第２草案23条の原文を朗読して反論しているのは、いかにも彼らしいが、その後、陳重も、同じ第２草案23条の原文を重ねて朗読しているのは、自分もまたドイツ語に堪能であることをアピールしているようで滑稽である[3]。

しかし、伊藤博文は、その後もっぱら梅を重用するようになる。その結果、陳重は、弟・八束（やつか）とともに、伊藤の政敵・山県有朋に接近してゆくが、陳重の三女・晴子は、父の書斎の聖徳太子の画像が、ときどき梅の筆になる「精神一到何事不成」の幅に掛け替えられたことを記憶している[4]。明治29年生まれの晴子が「女王様ごっこ」（と原文にある）をしていた頃であるから、梅はまだ存命中で、伊藤の懐刀として華々しく活躍していた時代である。書も能くする梅は、頼まれると決まって「精神一到何事不成」と書いたが、それを書斎に掛ける時の陳重の心持ちは、いかばかりのものだったのか。

4　もっとも、陳重にとって最大の不幸は、留学時代には法律学を席捲していたダーウィニズムが、その後一気に衰えたことであろう。その結果、今日では、未完の大作『法律進化論』を読む者もなく、わずかに「法律小話[5]」の蒐集が知られるにすぎない。

1）〔写真出典〕『穂積陳重遺文集（第２冊）』（岩波書店、1932年）口絵写真。
2）法律新聞501号（明治41年６月５日）27頁。
3）「法典調査会民法主査会議事速記録」『日本近代立法資料叢書13』（商事法務、1988年）402頁、403頁。
4）市河晴子「穂積陳重」有島行光ほか（著）『父の書斎』（三省堂、1943年……〔再刊〕筑摩書房、1989年）162頁。なお、穂積重遠所蔵の「精神一到何事不成」の掛軸は（穂積重遠「穂積陳重の観た梅先生」志林49巻１号（1951年）104頁）、父・陳重旧蔵のものであろう。
5）岩波文庫版『続法窓夜話』の表紙コピー。

富井政章(1858-1935)

撮影年月日不明[6]

1　富井政章(とみいまさあき)は、安政5年9月10日、聖護院宮侍・富井政恒の長男として京都・武者小路通新町に生まれた。彼の前半生を特徴づけるキーワードは、貧困と苦学であって、京都中学校から京都府官立仏語学校に進学する際には、家庭の貧困ゆえに、一時は入学を躊躇したという。また、明治6年卒業後に上京した時には、司法省の法学生徒を希望するも、募集がなかったため、京都府仏語学校時代の恩師デュリーの薦めで、嫌々ながら馬医学校を受験している。結局、1番で合格したのに入学せず、明治7年東京外国語学校[7]に進学するが、在学中の明治9年来日したフランスの富豪ギメの通訳の仕事をした縁で、翌10年にフランスに渡航、当時リヨンにあったギメの東洋美術館で働きながら、リヨン大学法学部に通う。なお、明治9年には司法省法学校（正則科2期生）の募集があったが、富井の受験を示す資料はない（富井より半年遅れて東京外国語学校に入学した梅謙次郎は受験している）。

明治16年2月、解除に関する論文で学位取得。審査員の一人は、フランス人の書いた学位論文と比較しながら、富井の論文のほうがフランス人の書いたもののように見えると賞賛したという。

2　同年4月に帰国した富井は、法政大学（当時は東京法学校）の創設者・薩埵正邦の家に寄宿して、同校講師となるが、同年11月の司法省雇を経て、翌17年2月には文部省雇・東京大学法学部講師、翌18年8月には東京大学教授に任ぜられる。仏法系ならば、明法寮・司法省法学校出身の官費留学生に優れた人材が多数いるにもかかわらず、なぜ富井が選ばれたのか、理由ははっきりしない。

この微妙なポジションが影響しているのか、それとも彼の生来の性格なのか、富井は、事あるごとに周囲に自分が病弱であることをアピールする。教室に薬瓶を持参するのはよいとして、体温計まで持ち込むのはいかがなものか。病弱である理由は、私費留学で苦学して、眠気覚ましに濃いコーヒーを飲み続けたため胃を悪くした、というものであるが、それならコーヒーを止めればよいものを、コーヒーも葉巻も大好きである[8]。

なお、嗜好に関していえば、富井曰く、「私の趣味としては子供の時から通じて相撲と大弓が大好きです、大相撲の時は大概欠かさずに10日間見に行きます[9]」。弓術は、先生に就いて毎週欠かさず通ったようである。また、この時代の法律学者には、なぜか相撲好きが多いが、梅謙次郎が相撲ファンになったのも、明治33、4年頃、東大の同僚である富井と土方寧に誘われて回向院の大相撲を観て以降のことという[10]。

一方、性格に関しては、「現今我法界多くの学者あり又博士ありと云へ能く温厚篤実の君子を冠して一人の異議なかるべきものは実に一人博士のみ」と賞される富井であるが[11]、「梅の知、富井の徳」と対比されることについては[12]、富井自身、これを自らの「立ち位置」と心得ていたように見受けられる。病弱もまた、この自己の立ち位置確保のための小道具であり、「近頃は大そうお元気のやうにお見受けすると御挨拶をしては先生の御機嫌を損ふのだ」との織田萬の言も[13]、あながち冗談とはいえない。

3　結局、富井は、3人の起草委員の中では最も長生きをして、昭和10年9月14日78歳の天寿を全うした。民法典編纂の折りには、腹痛で倒れた穂積陳重に薬を処方するほど[14]健康に関する知識を有していたことが、かえって幸いしたのであろう。

6）〔写真出典〕『富井男爵追悼集』（日仏会館、1936年）口絵写真。

7）同校は、もと外務省所轄の語学学校を明治6年文部省に移管したもので、その後、明治18年司法省法学校の東京大学法学部への吸収と同時期に、東京大学予備門に吸収された。『東京大学百年史（通史1）』（東京大学出版会、1984年）288頁、588頁。

8）なお、法律新聞555号（明治42年3月5日）25頁には、「世の人は富井は苦学する際には香水を飲んだと云ふ相であるが香水は呑めるものでも無いので……」と富井が述べたとあるが、本気で言ったものなのか、明治時代には笑いが取れた駄洒落なのかは、よく分からない。

9）法律新聞1386号（大正7年4月5日）13頁。

10）東川徳治・後掲注18）274頁。

11）法律新聞204号（明治37年4月30日）23頁。

12）日本弁護士協会録事39号（明治34年1月）147頁。

13）織田萬「富井先生の憶ひ出」法学志林37巻11号（1935年）31頁。

14）法律新聞1024号（大正4年7月15日）16頁。

梅謙次郎(1860-1910)

明治43年4月撮影(49歳)[15]

1　万延元年6月7日、松江藩医・梅薫の二男として生まれた梅謙次郎(うめけんじろう)は、郷里では、2歳年上の兄・錦之丞(1858－1886。後に東大医学部教授)、北尾次郎(1853－1907。後に東大農学部教授)とともに、驚異的な記憶力で「地獄頭」といわれた[16]。司法省法学校時代、彼が、1週間で仏文教科書300頁を完全暗記し(1度読めば充分なのに2度読んでしまった)、答案にそのまま再現したため、かえって減点されてしまった話は有名であるが、民法典に関しても、全条文を普通に暗記していた。

だが、10代までの謙次郎は、身体が弱かった。当初軍人志望であった彼は、明治8年陸軍幼年学校を受験するが、体格不良で落第、明治9年の司法省法学校(正則科2期生)の試験も、やはり体格不良で落第し、東京外国語学校卒業の年(明治13年)の欠員募集でようやく合格している。

ところが、この司法省法学校の生徒というのが、試し斬りと称して犬を斬り、寄宿舎の窓に吊しては皆で食べてしまうような連中で、その中にあって、梅は、一番の大食漢に変貌する[17]。何か悪いものでも食べたのか、腸チフスのため卒業試験は未受験。にもかかわらず、平常点に基づき首席卒業。現在のロースクールなら第三者評価で不適がつくであろう。なお、在学中の梅は実務家志望であり、同級生や教師アペールが、学者になるよう説得したという。梅が、後に伊藤博文幕下の司法行政官僚として活躍する素地は、この頃から存在していたわけである。

卒業の翌年(明治18年)10月東京大学法学部教員となり、12月に留学を命じられる。文部省発令の留学先はドイツであったが、当時の東大副綜理・浜尾新らと折衝し、フランス行きの便宜を図ってもらったらしい。リヨン大学で3年半学び、明治22年7月「和解論」で学位取得、リヨン市からヴェルメイユ賞牌を授与される。同論文は現在もなおフランス民法の解釈論として通用しているが、そのような日本人は、今日に至るまで梅のほか存在しない。学位取得後、当初の拝命通りドイツに転じ、ベルリン大学に1年間在籍の後、明治23年8月帰国。

2　なお、留学中の梅には、ジュール・サンドーの代表作「ラ・セーグリエール嬢」(Mademoiselle de la Seigliere, 1848)の翻訳もある[18]。また、帰国の年の12月に結婚した妻・兼子が、小泉八雲の妻・セツの縁戚であることから、明治36年東大が八雲を解雇した際(後任は夏目漱石)、梅は八雲の相談相手になり、翌37年9月の八雲死去の際には葬儀委員長も務めている。

一方、酒を控えるように、との八雲の忠告にもかかわらず、大酒を飲んでは「ヨウヨウ」と奇声を発する洋々学人の生活振りは相変わらずで、食べ物では、とにかく鰻が大好物、法政大学の理事会の食事は鰻定食が慣例となり、梅が渡韓した時の統監府では鰻代の出費が異常に増えた。「弁護士の徳義」と題する講演でも、代言人から弁護士への変化は、山の芋が鰻に化けたようなもので、依然として山の芋のような弁護士もいる、といった調子で[19]、梅にとって、鰻は常に「良きもの」の代名詞なのである。

3　だが、彼は、壮健となった肉体を過信しすぎた。明治43年夏に渡韓した際、またしても腸チフスに罹患。天は、今度は卒業時のような僥倖を与えなかった。8月25日(木)昼0時50分永眠。享年50歳。

戦後の昭和27年、末弘厳太郎の推薦で文化人切手シリーズに加えられた梅の10円切手の発売日は、命日である8月25日。護国寺の墓所の墓石は、敬愛した伊藤博文と同じ摂津産の花崗岩、石工も伊藤と同じ本郷駒込の酒井八右衛門。今年の夏も、護国寺や護国寺周辺の鰻屋に行くと、梅ファンの大学教授や編集者と顔を合わせる羽目になる。

15)　〔写真出典〕法学志林13巻8・9号(1911年)「梅博士追悼記念論文集」口絵写真。
16)　法律新聞662号(明治43年8月30日)22頁。
17)　法律新聞434号(明治40年6月30日)19頁。
18)　東川徳治『博士梅謙次郎』(法政大学・有斐閣、1917年)46頁以下に一部の紹介がある。ジュール・サンドー(Jules Sandeau, 1811－1883)は、パリ大学法学部の学生であった1830年、オーロール・デュパン(Aurore Dupin, 1804－1876)という名の奔放な女性と交際、翌1831年に合作で女優と修道女の物語「ローズとブランシュ」を発表。その後、彼の年上の愛人は、このときの筆名(Jules Sand)を、自分の筆名(George Sand)とした。
19)　日本弁護士協会録事57号(明治35年9月)101頁。

(しちのへ・かつひこ)